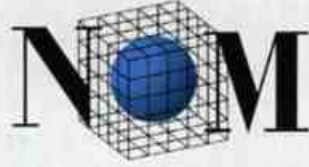


新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第11号

1998.9

野外彫刻の正しい鑑賞方法、もしくは展覧会「インサイド/アウトサイド」の効果的な利用の仕方について

インサイド/アウトサイド —日本現代彫刻の8人—

平成10年9月5日(土)～10月11日(日)

美術鑑賞も好きなのだけれど、天気の良い日は建物の中でなく、戸外の日差しを浴び風を感じたいと考えている欲張りなあなた、それならば、ぜひこの秋新潟県立近代美術館にいらしてみてください。長岡の街を一望できる美術館の庭園を散策することをお勧めします。これまで4つの大型の彫刻作品が点在していましたが、昨年冬に更に4体の作品が加わり、今現在8点の作品が置かれ、彫刻庭園と呼ぶのが相応しいようになりました。秋の爽やかな一日を野外での美術鑑賞に当ててみるのはいかがでしょうか。車で来られる方は、入口近くではなく、できるだけ奥の方に車を留めて信濃川の土手の方からぐるっと歩いて彫刻を見てください。何と言っても庭を歩いてみるだけなら入館料もいらないのであります。

それにしても、置かれている作品はちょっと風変わりです。芝生の上にはひたすら長くラッパが延びていますし、その上には赤茶色の鉄の巨



竹田康宏 (Do you believe?) 1997年 新潟県立近代美術館蔵

人が長岡の街を見据えています。鳥かごのようなものがあれば、くね々と伸びた赤い形が目を惹きます。その先には美術館を守るような一つの道祖神があり、ごろんとした石のナマコが横たわり、白く輝く大理石の上には三艘の舟が乗り上げ、芝生の上には鉄の花が開いているようです。

何だろう。不思議だね。面白いな。そう感じられたら、野外から館の中へどうぞ。ちょうど展覧会が開催中です。現在活躍中の日本の彫刻家、青木野枝(あおきのえ)、岡本敦生(おかもとあつお)、小清水漸(こしみず

すすむ)、竹田康宏(たけだやすひろ)、中岡慎太郎(なかおかしんたろう)、舟越直木(ふなこしなおき)、前田哲明(まえだのりあき)、松井紫朗(まついしろう)の8名を取り上げています。野外の作品は彼らに制作を依頼したものです。作品はそれぞれ作家が長岡の場所や環境を見て、何かを感じて(真冬の積雪の様子も体験していただきました)、構想を考えたものです。ですから、もうすっかり我が物顔に場所に納まっている作品は、ここ長岡での最良の作品と言えるでしょう。しかし、野外の作品は環境に合わせてかなり大きくなりますし、天候に対する耐久性も考慮しなければなりません。いつもの仕事とは違った面を多く持たざるを得ません。それなら、普段はどのような作品を制作しているのか、それも合わせて美術館の中と外とで一緒に見てみようという展覧会が「インサイド/アウトサイド」です。幾つかの作品をまとめて見ることは、その作家がどのような考えを持っているのか理解するための一番良い方法であります。また、外の作品と内の作品を同時に見ることで、それぞれの差異がお互いの性格を明らかにし合うのではないかと考えています。更には、個別の作品の中にも内側と外側をめぐる問題意識を探ることもさえ可能です。

ただ、勿論それぞれの作家の意図は、決して一括りにされるものではありません。束縛から解放されている現代の美術は多様です。たとえ素材が同じでも、扱う方法、作品に対する考えは、作家それぞれによって異なります。どこにもない、これまでどこにも見たことのない作品を生む独自の8つの個性をこの展覧会では楽しんで見ていただけるはずです。

鉄の持つ軽やかさを荒々しく解放してみせる青木、遙かな時間の堆積を解体と構成により石に語る岡本、極めて洗練された造形感覚に伝統的な日本的感性もこだまする小清水、植物に根を持ちながら広く生命の持つうねりの形を探る竹田、太古のロマンを求めつつ現代的な新たな具象彫刻を模索する中岡、たまゆらにほの見えた不思議な生命体を変奏を生みながら具体化する舟越、大きく伸びやかなスケールでもって鉄に



舟越直木 (藍の夜) 1997年 新潟県立近代美術館蔵

温もりを感じさせる前田、豊かな想像力に裏打ちされた大胆な発想で多様な素材を楽しげに扱う松井。このように語って見たところで、少ない言葉ではとても彼らの豊かな作品世界を掘り上げてみせることはできません。「百聞は一見に如かず」です。

それで、野外作品の「正しい」鑑賞方法でした。館内に展示されている作品に手を触れることは作品を損ねますので遠慮していただくしかありませんが、野外の作品は見るだけでなく直に作品を体験して感じることができます。ただ美術の世界が○か×で二分できるほど単純ではないことに気づいていればおわかりのように、唯一の「正しい」方法はありません。ただあるとすれば、面白い見方と、もっと面白い見方との競争でしょうか。わからない=関心と呼ばないと、作品から遠ざかる前に、しばしそこに立ち止まってみてください。まずは作品となった作者の個性的なものの見方に教わること。新たな眼が見開かれたならば、更に実際に動いて様々な視点からためつすがめつ、もっと面白い見え方、何かを感じる見方を探して楽しむことが彫刻には可能です。また外の作品は天候によっても様々に表情を変え、いつもそこにありますが、同じように見えることはありません。

まずは作者が作品を創造しました。今度は見る側が、それを受け継いでより一層新しい面を作品から創造する番なのです。

(美術学芸員 桐原 浩)

「日本の美・間の芸術」

平成10年10月31日(土)～12月6日(日)

Q 間の芸術とは、何ですか。

「せぬところがおもしろい。せぬところ そのものを技にしてはならない。技にしないで、しかもそれが、技のなかの技として通用するところに能の神髄がある」(世阿弥)

描かれた部分に対して描かれていない部分はその余りである。あらゆる動作が主であって、動作をしないときは従である。言葉や声を発しているときが主であり、無言、無声であるときは従である。

日本伝統芸術では、この本末関係はまさに逆なのです。余白、無動作、無言、無声が主であり、描かれた部分、技の部分は従なのです。この描かれていない空間表現が「間」と言えるのです。描かれたものと描かれていないものとの関係が主要であり、これを「間の芸術」と言えます。例えば、伝統芸術である水墨画について観ます。観る人は、描かれたものを観てから余白に眼を移すことでし



小林古徑(琴) 1927年 東京国立近代美術館蔵

しょう。しかし、描くときは白から出発するのですから、これを観るときもまた、余白即ち白を大地として、これを観ることによって、真に水墨画を味わうことができます。白を基盤として、その中から画像が自ら問いかけてくるのです。これが「間の芸術」なのです。

Q 今、なぜ、間の芸術なのですか。

「現今洋画と言われている油絵も水彩画も又現に我々が描いている日本画なるものも、共に将来に於いては、日本人の描いたものとして、凡て一様に日本画として見られる時代がくる。皆一様に統一されてしまい、そこに使用される材料の差異のみが存在することと思う」(菱田春草)

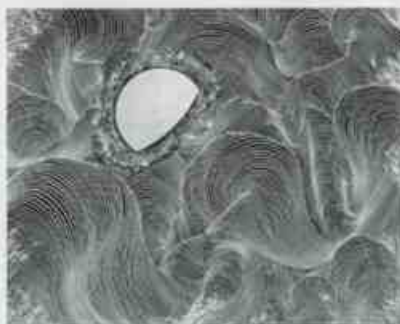
春草の予言が的中したとも見えるが、見込み違いでもあります。皆統

一されただけでなく、日本芸術の思想、理想、精神までが吸収されようとしています。現在、日本画界は重大な岐路にあります。日本画本来の精神性とは何か、持続性とは何か、問い直すときです。日本芸術の精神性の極地である「間の芸術」を捉え直し、間の芸術の過去の精神、現代の思想、そして、未来に向けた創造的な理想を解明していく必要があります。

Q この展覧会の見所はどこですか。

「三十六人集の装飾的絵画空間を表現する感覚の際立った見事さは他に類がない。それは美しい色彩の世界であり、同時に繊細な線に対する感覚を示す世界でもある。この美しい料紙とかな文字による極めて装飾化された抽象的世界は、日本美術の絵画的空間である」(加山又造)

日本芸術には偉大な伝統があり、技術の素地があり、優れた精神的感覚があります。加山又造の大作《雪》《月》《花》のうち《雪》は、三十六人集からヒントを得て描かれました。古典の中にある神秘性、装飾性を現代の感覚で蘇らせたのです。この展覧会では、その中の《月》が出品されます。日本の伝統美である線



加山又造(月) 1978年 東京国立近代美術館蔵

を主流にし、昭和の琳派とも言える間の芸術です。日本芸術は間といえる空間の中に思想、理想、精神性を表現してきました。さらに、自然の生命感をもその中に秘めたのです。日本芸術は優れた装飾的空間芸術です。そこに間が存在するのです。アルミニウム箔を用いた波状曲線による大画面は、無限の空間の表現となり、観る人をその中に引きずり込むかのようです。ここでは、日本的装飾を基本としながらも動的な「間」を創造しています。

「私は夜にして月と霧氷をとも考えた。白と黒の対象なら画面も強くなる。しかし、作品の強さとは色調とか構図ではなく、画面の中に籠る作者の心の強さであると思い、白とグレーで仕上げた。そして、白い技が交錯してかもしだす夢幻的な雰囲気も私は描きたかった。一種の淡さのトーンの支配することがそのためにも必要であった」(東山魁夷)



東山魁夷(冬) 1964年 東京国立近代美術館蔵

間は宇宙空間の表現であり、イメージの世界でもあります。《冬》は、イメージの光景と言えます。白光から降り注ぐ淡い光線と白樹から放つ光とが空中で織り交ざり、宇宙を永遠なものにしています。「雪月花」も天地の表現であり、広く宇宙観の表現と言えます。冬は雪花を同一画面に集約した芸術と言えます。

この展覧会では、大画面を通して日本芸術の不易性としての間の芸術の源流を探るとともに、東京国立近代美術館・京都国立近代美術館及び新潟県立近代美術館の名品を紹介するものです。

Q 日本画の将来はどこへ行くのですか。

日本画界は、イメージの行き詰まりにより混迷しているとも言えます。日本芸術は自然の中にある生命感、精神性を時には装飾的に、時には抽象的に表現してきました。この不易性としての間の芸術を基底に、永遠性、持続性としての近代化を推し進めることが日本画の将来を考える上で重要なことでしょう。

(副館長 親跡 峻)

デザイナー・亀倉雄策展(仮称)によせて

平成11年2月2日(火)～3月14日(日)

昨年5月、82歳で惜しくも亡くなった国際的グラフィックデザイナー亀倉雄策氏(新潟県吉田町出身)は創造活動の一方、自分の眼に適った美術品や民族資料を集めた有数のコレクターとしても知られていた。本年3月のこと、幸いにも亀倉氏と新潟県との間のポスター制作や展覧会開催を通じて培った絆と、さらに、長岡の地が亀倉家の出身地であることが機縁となり、氏が生前に収集したコレクション一括が兄亀倉英治氏を代表とするご遺族の厚意で新潟県に寄贈され当館に収蔵された。この「亀倉雄策コレクション」の総数は281点。その内容は絵画、版画、彫刻、工芸、民族資料、書籍と多岐にわたる。コレクションの特色を以下に要約すると、① 世界各地の交友のあったデザイナー、画家、彫刻家、書家を中心にした幅広い作家の作品。具体的にはピカソ《テーブルの上のギターと楽譜》(1920年)、ベン・ニコルソン《Painting》

(1946年)、海老原喜之助の佳品《市場》(1937年)などの絵画。マリノ・マリーニ《馬と人》、イサム・ノグチ《女》

(1956年)、有元利夫《女性像》などの彫刻。亀倉氏にデザイナーになるきっかけを与えたフランスデザイン界の泰斗カッサンドルのポスター《VENEZIA》ほか。

② 亀倉氏自身が気に入って集めたロシアのイコン、朝鮮李朝の民画、アフリカの仮面などの民族資料。③ 19世紀のヨーロッパで刊行された地誌関係の稀覯本と亀倉氏自身の装丁にかかる豪華画集。④ 亀倉氏が受賞した各種の賞のトロフィーや賞状、となる。いづれも亀倉雄策氏の制作活動の周辺と、その人間像を浮かび上がらせる貴重な作品、資料である。

さて、一般公開を期待するご遺族の意向に応え、また県民に一日でも早い鑑賞の機会をと企画された来年2月の展覧会だが、以上のコレクションと当館既収蔵の亀倉雄策のポスター、さらに故人を追悼して制作された国内外の著名デザイナー、画家の作品43点を加えた3部構成で、時代をデザインした男・亀倉雄策の肖像を多面的に紹介したいと考えている。

(学芸係長 小見秀男)



海老原喜之助《市場》1937年



亀倉 雄
(KAMEKURA)
1998年

コラム / 映画鑑賞会のこと。あるいは何を上映するのかについて

当館では開館3年目から無料の映画鑑賞会を行っているのだが、この映画鑑賞会で何を上映するのか、これを決めるのが実は本当にたいへんなのである。それは、いわゆる一般的な映画のほとんどがレンタルビデオになっているということである。レンタルビデオ店で簡単に借りられるのに、美術館の映画鑑賞会で取って上映する必要があるのかということなのだ。確かにテレビ画面とスクリーンの大画面は違うのだから意義はある。だから「名作!!」「巨匠の名画」の枠それぞれ年1回は行うことに決めた。でもいくら多くの方々において頂けるとは言え、これ以上増やすと美術館の映画鑑賞会としての特色がなくなるような気がするのである。それではその特色とは何かということなのだが、美術、特に現代美術においては映像表現が活発になり、実験映画など映像自体が美術作品であるのも少なくないし、また芸術家自身が主人公のドキュメンタリーもある。しかし、一般にはなかなか見ることの出来る機会も多くはないし、ましてやビデオソフト化もされているのも少ない。こういう作品こそが、まさに美術館ならではの企画ではないかと思うわけである。というようなことを考えて意気込んで作った枠が「アートドキュメンタリー／芸術の世界」と「実験映画／動きの魔法」なのだが、この枠の映画が見事に入らない。鑑賞者の人数だけでみても「名作!!」「巨匠の名画」の枠の半分位である。ここで明言しておくけれども、決してマニアックな映画

を選んでるわけではない。私自身、難解なものとか退屈なものは選ばないようにしているし、内容も事前に試写等で確認するようにしている。だから適当にタイトルや前評判だけで作品選定はしていない。例えば、「実験映画／動きの魔法」の約一時間半程のプログラムを組むために、毎回約30本近くの実験映画を実際に見てその中から作品を選んでいる。これは皆さんが考える以上に結構辛い作業である。作品の全てが愉快で楽しい作品という筈もなく、というより実験映画というだけあってアクの強い作品の方がむしろ多い。正直言ってこれをこれだけ見るとさすがに具合が悪くなってくる。見ていて本当に気持ちが悪くなった作品もあった。そんな思いをしなから、それでも砂の中には砂金があるように、珠玉の作品だって明らかに実験映画の中にも確実に存在する。これこそ、ここ数年の経験の中で分かかってきたことでもあり、それなりのラインナップが徐々に成立してきているような気がしている。だから、決して大勢入ってはいないけれど、アンケート等で10代の方の「今までみたことのない映像ばかりで、貴重なことを体験した」とか50代の方の「すごく良い試みだと思います」なんて書かれると心の底から本当にやっていて良かったと思うのである。だから「実験映画」も是非見に来て下さい。

(美術学芸員 藤田裕彦)

野外彫刻と語らう ―屋外庭園から (5) 芸術美

竹田 康宏《“Do you love me?”》



Do you love me?—あなたは私を愛していますか。タイトルになっているこの言葉は、一体誰から誰に向けて発せられたものでしょうか。

美術館の裏手にあるこの作品は、真南に向かって立っています。真っ赤なりボン状の葉が、空間に柔らかくあたたかい曲線を描きます。真正面から見ると2枚の葉がハート形を形づくっていることに気がきます。この形と肉厚の葉、少し深みのある赤い色などが私たちにあたたかな気持ちにさせるのでしょうか。高さ4.5メートルの作品の内側に入りこんでみましょう。赤い葉にやさしく包み込まれて穏やかな気分になります。

植物の形は自然を表します。2枚の葉が支え合う姿は協力、共存の重要性を意味しています。今、人間は自然と共存できているといえるのでしょうか。タイトルの言葉を発しているのは、実は“自然”なのです。植物と生命をテーマに制作を続ける作者は、「自然は今、ひとりひとりに“Do you love me?”と問いかけ続けている。あなたは、“I love you.”と言葉を返すことができるだろうか?」と、私たちに疑問を投げかけています。

(美術学芸員 宮下東子)

「彫刻を遊ぼう!」 ―常設展示室3の試み

美術館の作品は、いつも柵やガラスの向こう側で、すましているような気がしませんか? 作品の保存のためには、外から加わる力を遮断し、痛みから保護する対策は不可欠なものです。ですが、ある種の心理的な距離感がそこに生じることも、また、確かなことでしょう。逆にいえば、隔離された作品ばかりを目にする経験の積み重ねが、受け身の鑑賞態度を培うことになってしまっているのかもしれない。

本来、美術作品を‘見る’行為は、それが‘目に入ってくる’という受動的な立場とは正反対の、より積極的、能動的な作業です。たとえば、目の高さをちょっと変えてみましょう。視線を10センチずらすだけで、全く別の顔が現れてくることがあり

ます。彫刻のような立体作品の場合は、たいていは裏側にも回ることができます。正面だけで満足せずに、身体を動かして自分の好きな角度を見つけてみましょう。光の当たり方ひとつで、作品の印象は大きく変わります。表わされている内容についても、作者がつけたタイトルを鵜呑みにしてはいませんか? それよりも、自分の目が何を発見したかの方がずっと大事なことです。

意識的に参加すること。そして自ら近づいていくことで、展示室の8点の彫刻との対話を楽しんでください。作品を最終的に完成させるのは、それを前にした皆さんの一人一人であると思います。

(主任学芸員 佐々木奈美子)



戸塚幸男《片胸の男》をよ上から見る!

美術館友の会からのお知らせ

新潟県立近代美術館友の会は美術を愛する人の会です。鑑賞会や研修旅行、会報発行などの活動を通じて会員相互の親睦を深め、美術館の活動や運営に協力します。

常設展の無料観覧や企画展の無料観覧券の配布、図録やレストランの割引などの特典があります。

◎企画展開場式のご案内

インサイド/アウトサイド

9月4日(金)午後2時～

日本の美・間の芸術

10月30日(金)午後2時～

※当日は受付で会員証をご提示ください。

◎これからの催し

野外彫刻探訪 9月10日(木)午後2時～
野外展示空間を散策しながら、設置作品を鑑賞します。企画展示室ロビーにお集りください。雨天の場合、企画展示室内の作品を鑑賞します。

棟方志功と古都金沢の旅

9月25日(金)～26日(土)申込必要

友の会作品展覧会

11月3日(火)～8日(日)(最終日午後3時まで)
会場:2階ギャラリー

※ご自身の趣味の作品を発表してみませんか。また会場づくりの参加者を募集しています。

[問い合わせ先:友の会事務局 TEL.0258-28-4111]

利用案内

■開館時間/午前9時～午後5時

■休館日/毎週月曜日

ただし11月23日(月)は開館し夏休館となります。
※10月12日(月)～10月15日(木)、12月24日(木)～平成11年1月4日(月)、平成11年3月26日(金)～3月31日(水)は保守点検のため休館します。

■観覧料金

- ・企画展観覧料
企画展によって観覧料が異なります。
なお、開観覧料で、常設展もご覧いただけます。
- ・常設展観覧料
一般……410円(330円)
大学・高校生……200円(160円)
中学・小学生……100円(80円)
※〔 〕内は20名以上の団体料金です。

THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館

新潟県長岡市宮岡町字掛旗278-14〒940-2021
TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

美術連話(11) 「センチメンタル・ジャーニー(その二)」

新潟県立近代美術館長 前川 誠郎

歳をとるとはどういうことなのか。先般の海外出張で私はそれを嫌ほど実感した。出発前に三冊の書物の仕事が多くなって、自分では結構楽しみながら筆を進めたつもりであったが、どうも体調が秀れない。それぞれの仕事に何とか区切りをつけて健康に多少の不安をもちながらロシアへ向けて旅立った。エルミタージュでの作業は最も肝心の点で今回は決着を付けるに至らず、その解決を次回以降に持ち越す仕様となった。サンクト・ペテルブルクに一週間いて日本総領事館の招宴などこれまでにない趣向にも巡り合わせた。私の心は奥底で何となく晴れやらぬものがあつた。

ロシアのあとの数日を私は久しぶりで南ドイツのミュンヘンで過ごした。昭和三十三年に初めて訪れて一年間滞在したこの町は私にとって第二の故郷とも言うべき土地である。その美術館アルテ・ピナコテークはウィーン的美術史美術館と並んでデューラー絵画の質量ともに抜群の収集を誇っている。中でもこの画家の最大傑作《四人の使徒》の意味論について一冬を費やして小論を書いた想出は今も忘れ難い。

ところで今から丁度十年前の1988年4月21日に、《悲しみの聖母》《バウムガルトナー祭壇画》および《グリーム家の哀哭図》の三点五面に酸が掛けられ大きな損傷を受けるという惨事が生じた。この種の事件は連鎖反動的に起こるもので、第二次大戦後アムステルダムの《夜警》(レンブラント)、エルミタージュの《ダナエ》(同上)そしてミュンヘンのデューラー画の受難とシリーズ的に続いている。今回訪問したエルミタージュとピナコテークでこれらの災厄を受けた名画の修復記念展が期を一にして行われているのを見るのができたのは、あつてはならないことながら、美術館人として深い感慨を禁じ得なかった。両館ともに今日の修復技術の極限を駆使して見事な再生がなされている。

《ダナエ》は昨年十月にもエルミタージュへ行ったとき、専門家対手の修復完成披露会が開かれ、私もその席に連なつた。一見するところでは蘇生した絵は完全に旧の姿を取り戻したように思われる。しかし私はその日の招待客の中でも最長老と見える老人が、今は取り戻す術とてないダナエの昔日の輝きを惜しんで止まない、その場の雰囲気大きな感銘を受けたのであつた。それはアムステルダムでもミュンヘンでも同じことであろうかと思う。

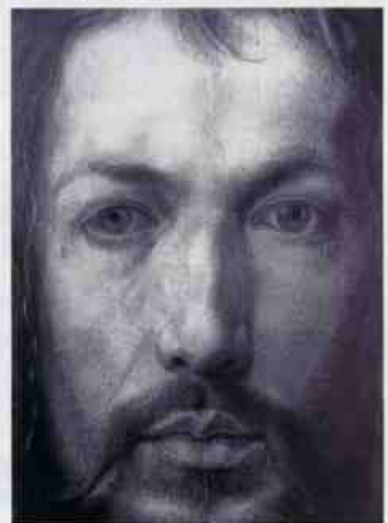
今般のデューラー展では被災した三画の他にもピナコテーク所管のデューラー画の全てを併せて展示し、詳細

な修復データを掲げたカタログは600ページの大冊である。測ってみたら重さが2.5キログラムある。どの絵も私には懐かしい限りであつたが、専門家の間で特に話題を呼んでいたのは、デューラーと言えど誰でも直ぐに想起する《1500年の自画像》の赤外線写真をデジタル処理することによって実に鮮明な下絵(写真参照)の存在を確認し得たことである。細かいハッチングを重ねて克明に陰影を描写した下絵はこの画家の最良の細筆素描である。上から塗った絵具が描線を掩い隠して了っているのが惜しまれるとさえ言えるほどの精密さである。

ミュンヘンへ行く前に立寄つたフランクフルトで、ピナコテークでは絵画展と併せて開催中のデューラーの版画展を必ずみるように言われていた。しかしそれは私が絵画展を訪れた日の二日前に終わつてしまつた。探しても見付からないので守衛にきくと、都合があつて途中で打切つたのだが、もう直ぐ版画の学芸員が来る筈だから事情を話してごらんさいとのことであつた。そして対応してくれたゼンフ氏の特別の計いで翌日別の建物へ移されていた版画全五十点を、一つ一つ手に取つて観照するという願つてもない幸運に恵まれたのであつた。ゼンフ氏が私の師ハイデンライヒ先生の最晩年の教え子であることが分かつたのも幸運であつた。

その夜は恩師の後継者ですでに退官しているS教授がハイデンライヒ未亡人をも呼んで晩餐会を開いて下さつた。丁度サッカー大会の前哨戦がテレビ中継されているときで、レストランでは時々歓声が挙つた。私が初めてミュンヘンへ行って間もなくはソ連のスプートニク衛星が話題を掠つていた。それから41年後の今度はワールド・サッカーであつた。私は旅の疲れを忘れてこのセンチメンタル・ジャーニーを愉しんだ。

(3枚の菩提樹の板を縦に接合した高さ67、幅48cmの画板に白チョークで地塗りし、筆で下絵を描いている。)



(1500年の自画像下絵)

表紙作品解説 竹内栖鳳 《睡郷》

「睡郷」とは夢の国、眠っている間に魂の行くところ、を意味します。この作品は、栖鳳得意の動物画です。木箱の中で愛らしい子犬が夢でもみているように描かれ、見る者の心を描らえます。

実に見事な筆さばきで、柔らかな肌触りを感じさせる描線ですが、同時に氣迫を込めた鋭い描線でもあります。この描線は栖鳳の他の作品にも共通しています。